

戸田城聖の教育出版事業

創価大学成立史の一視点

塩 原 将 行

1. はじめに

創価大学の建学の源流は、1930（昭和5）年に創価教育学体系を世に問うた牧口常三郎に遡ることができる。創価教育学による学校の構想は、太平洋戦争の戦禍と戦後の混乱期を越えて戸田城聖が受け継ぎ、さらにその構想は1950（昭和25）年に戸田から受け継いだ本学創立者池田大作によって、1966（昭和41）年の創価学園の開校を第一歩として世界的な広がりをもって大きく開花することになった。

創立者は、本部棟落成祝賀会において、牧口以来の創価大学設立の系譜を語った¹。「牧口先生は常々、『戸田君が必ず創価大学をつくってくれる』と語られていたのであります。牧口先生の義理の娘に当たる貞子さんによれば、牧口先生は座談会で、しきりに、おっしゃっていたそうです。『将来、私が研究している創価教育学の学校を必ず僕が、僕の代に設立できないときは、戸田君の代で作るのだ』『小学校から大学まで私の研究している創価教育学の学校ができるのだ』と。」また、創価教育学体系の中にも創価大学・学園の構想が記述されている²。

本稿では、創価教育のパトンを受け継いだ戸田城聖が、創価教育の学校開設に向けてどのように行動してきたのか、1920（大正9）年の牧口との出会いからその足跡をたどってみたい³。

2. 創価教育学体系の出版と戸田城聖

a. 牧口常三郎との出会いと時習学館の開校

戸田城聖（本名；甚一）が、牧口常三郎と初めて会ったのは、大正9年春⁴、牧口が西町小学校の校長であった時⁵である。当時東京で教職を求めた北海道師範学校の同窓生は必ず牧口を訪ねたという⁶。戸田もまた紹介状を持って牧口を訪ねた。夕張の真谷地尋常小学校を途中で退職した戸田であったが、牧口は、「臨時代用教員」として西町小学校に

採用した⁷。しかし、同年6月に、権力者に媚びない牧口は西町小学校を追われ、東京市の中で最も貧しい子供達が学ぶ学校のひとつである三笠小学校に左遷になる。戸田もまた、7月に三笠小学校に奉職する⁸。そこで貧しい子供たちの為に教育の実践にあたる牧口であったが、この三笠小学校をも退職させる動きがあった⁹。

牧口にとっても、戸田と出会った大正9年頃は大きな転機の時期のように思える。『環境』第1巻第9号の「牧口氏の人格と其研究」という記事には、「最近は過去十年間に於ける思索実験の所産たる『創価教育学体系』の完成につとめ¹⁰」とあり、左遷が繰り返されてきた、およそ大正9年以降に独自の教育学構築への研究が本格的に始まったことを伝えている。また、同年2月には、牧口は帝国教育会に入会している¹¹。

牧口は、大正11年4月に白金小学校の校長に転勤となる。大学進学を考え戸田は3月に三笠小学校を退職する¹²。戸田が、時習学館を白金小学校からも遠くない上大崎に設立するのは大正12年12月¹³である。しかし、同年9月に襲った関東大震災の直後であり、決して恵まれた時期の開校とはいえない。この頃から戸田は城外を名のようになる。大正11年頃に戸田は浦田ツタ¹⁴と結婚するが、一歳の長女恭代を大正13年に肺結核で亡くし¹⁵、大正15年にはツタもまた結核で亡くす¹⁶。しかも、戸田自身も結核に罹っていた。戸田は、大正14年4月に中央大学予科に入学、昭和3年に予科を卒業し本科経済学部に進学している¹⁷。

b.『創価教育学体系』の出版を巡って

戸田は、昭和5年11月から始まる創価教育学体系の出版¹⁸のために原稿の整理、出版費用の工面など全てにわたり尽力した。当時30歳の戸田は、時習学館の経営者であり、教師であり、中央大学に学ぶ学生であった。その上、結核はまだ十分癒えず、友人と共同生活をする中で牧口を支えたのである。

創価教育学体系出版にあたっての経緯を戸田は、昭和25年11月12日に行われた牧口の七回忌法要で述べている。戸田宅で夜の十二時まで、二人で火鉢をかこんで学説の発表について語り合ったこと、出版費用は戸田が負担すると申し出たこと、創価教育の名称も二人の対話で決まったこと、さらに、整理・編集作業を依頼した後輩教員が真剣に取り組もうとしなかったため、戸田が牧口の膨大な草稿を第三巻まで整理したと述べている¹⁹。戸田は、昭和5年6月には、ベストセラーとなった『推理式指導算術』を出版しているが、自身の出版を進めながら牧口の前稿を整理していたのである。

牧口が創価教育学体系の出版を進めている時期に、牧口を退職させよう、白金小学校より追い出そうとする動きがあった²⁰。この動きを封じ、牧口が現職の校長として教育学説

の出版²¹ができるようにするために、戸田は、牧口を慕う人々と共に対策を練り、その中で、創価教育学支援会が結成されたと考えられる²²。

また、資金の捻出にも戸田の力は大きかったであろう。昭和4年から時習学館は中等学校進学希望を対象に「東京府総合模擬試験」という名の模擬試験をはじめたようだ。時習学館に通える人数は限られるが、模擬試験であれば多くの子供たちを集めることができる。翌年5年からは本格的に10月から隔週、受験の3月まで行うことになった²³。昭和11年からは、神奈川でも行われたようで、当時横浜の朝日講堂で受験した高崎隆治氏は横浜会場の運営にあたっていた戸田と思われる人物の印象とエピソードを鮮明に記憶している²⁴。

教育学者としては勿論無名で、小学校の校長にすぎない牧口であったが、『創価教育学体系』出版後いくつもの教育雑誌に論文等が掲載され²⁵、書評で紹介されている²⁶。教育雑誌『小学校』においては牧口が連載で創価教育学体系を紹介する論文を発表すると共に戸田もまたインタビューに答える形で創価教育学体系について3項目について答えている²⁷。(資料として付記した)戸田は、創価教育学体系を世に出していくために広報活動までも担っていたのではないかと²⁸。

牧口は、体系第1巻の緒言に「就中戸田城外君は多年の親交から最も早い理解者の一人として、その自由なる立場に於ける経営の時習学館に実験して小成功を収め其の価値を認め確信を得たので、余が苦悶の境遇に同情し其の資材をなげうつて本学説の完成と普及に全力を捧げんと決心し、今では主客顛倒、却つて余が引摺られる態になったのである。」と戸田への深い感謝を述べている。

3. 創価教育学の実現に向けての活動

a. 創価教育学に基づく著作活動

昭和3年6月4日、関東軍によって張作林爆死、この事件を導火線に満州事変が始まる。創価教育学体系が出版される4日前、昭和5年11月14日には浜口雄幸首相が東京駅で狙撃され重傷を負う。時代は刻々と軍国主義の暗闇へと入っていく。昭和7年3月、満州を占領した日本は、満州国の建国を宣言する。同年5月15日、海軍将校等は首相官邸等を襲撃、犬養首相を射殺した。このような時代に戸田は、創価教育学の実現に向けての活動を開始した。

戸田は、時習学館において教育実践を行うとともに、昭和4年以降多くの受験参考書を出版している。まず、昭和4年12月頃、城文堂から『中学校入学試験の話と愛児の優等化』を出版、続いて、昭和5年6月に『推理式指導算術』を出版、同書は、当時の子ども達の

中で百万部を超えるベストセラーとなったといわれている²⁹。その背表紙には、「創価教育学原理による推理式指導算術」³⁰とある。このタイトルが示すように、戸田にとって指導算術は、単に時習学館のプリントの集大成だけでなく、牧口の創価教育学の実践にあった。戸田は、「推理式」を冠した多くの著作を出版する³¹。昭和8年、山田高正と共著で『推理式読方指導』五年用と六年用を出版、昭和13年頃の改版以降は戸田の単著となり、名称も『推理式指導読方』と改め、第九卷五年前期用、第十卷五年後期用、第十一卷六年前期用、第十二卷六年後期用の4冊の出版する。指導読方の普及版は、尋常小学校三年用の第五巻第六巻から六年用の第十一巻第十二巻まで8冊が出版されている。この他に推理式シリーズとしては、日本小学館編『推理式指導地理』、戸田監修の読方、算術、理科、地理、国史の推理式学習帳が出ている。その他に、戸田の著書として、『尋常小学副算術書』『仕上の算術』『中・女学校試験地獄の解剖』『必らず聞れる口頭試問—新制度に適應せる—』『少国民常識読本』『愛児の優等化のために』、編著として、『理科地理歴史三科指導』等がある³²。

b. 『小学生日本』『小国民日本』と大道書房

昭和15年になって戸田は、日本小学館から小学校5、6年を対象とした学習雑誌を出版する。1月に『小学生日本 五年』を創刊、その後、読者が六年生になるのを待って4月には『小学生日本 六年』を創刊、戸田は、その各毎号に巻頭言を書いていると思われる³³。

昭和12年7月の盧溝橋事件をきっかけに日本は中国との全面戦争に突入、戦争の激化と共に、尋常小学校・高等小学校は、国民学校と名称が変わり、昭和16年3月、戸田の少年雑誌は、発行所、小国民日本社、誌名も『小国民日本』と変更する³⁴。6月に発行された『小国民日本』第3巻第3号は時局を反映して海軍を紹介した内容になっている。しかし、第4号では、一転して軍事色の全くない紙面になっている。厳しい出版統制のなか、戸田の苦勞がこの紙面作りから知ることができる。また、当時の発行部数と購読者の地域分布を知る手がかりとして、小学生日本の誌上考査問題の参加総人員と優秀者が記載された記事がある。昭和16年6月には8738人が応募しており、全国に読者がいたこともわかる³⁵。

戸田は、なぜ日本小学館、小学生日本という「日本」という言葉にこだわったのであろうか。師である牧口は上京後、大日本高等女学会の主幹として女性のための通信教育を行った。一時期、少女雑誌『日本の少女』を出版する大日本少女会の主幹も兼務した。「日本」という言葉には、全国の子供たちに向けられた牧口の慈愛を弟子として受け継ぐ意味を込めたのではないだろうか。

昭和17年4月を以って『小国民日本』も廃刊となる³⁶。翌18年7月6日には、戸田は牧

口とともに治安維持法・不敬罪によって逮捕³⁷、同年11月には、教師陣の学徒出陣などで時習学館も事実上閉鎖、戦災により時習学館はじめ戸田の事業は壊滅して昭和20年8月の終戦を迎える。

戸田は、少年雑誌の創刊と共に昭和15年5月から単行本の発行を始めている。出版社の名前は、初めて出版した子母沢寛の『大道』に因み大道書房と名付けた³⁸。子母沢は、戸田の兄の友人で、同郷厚田村出身の小説家である。同社から出版された本を著者別に見ていくと、子母沢寛の25冊を筆頭に、長谷川伸6冊、野村胡堂4冊、陣出達朗4冊、土師清二2冊があり、江戸期や維新时期を舞台にした歴史物が殆どである³⁹が、その中にはアメリカの女性作家ローリングス原作の『森の仔鹿』のような少年対象のものもある。少年対象のものは、日本小学館のほうから3冊出版している。

c. 戦後の出版活動—『冒険少年』『少年日本』等

戸田は終戦後すぐに中学生を対象とした数学と物象（物理）の通信教授の事業を始める。終戦の8日後（昭和20年8月23日）には朝日新聞に広告を掲載し⁴⁰、いち早く子供達を対象とした通信教授に取り組めたのは、戦前の時習学館と『小学生日本』『小国民日本』における誌上考査の経験があったからであろう。

しかし、昭和21年5月以降、戸田は、単行本の出版に切り替える。池田は『人間革命』で、日本正学館から昭和21年7月から23年9月までに『民主主義大講座』5巻が出版された当時のことを紹介している。戸田は、日本正学館以外⁴¹にも、日正（にっしょう⁴²）書房から子母沢寛を中心に江戸川乱歩⁴³、横溝正史など26冊出版している。その中には、昭和21年7月に出版された、『タノシイコども』という日本の子供達の季節行事を紹介した日本語英語併記の色刷り絵本もある。

昭和23年7月、戸田は、日本正学館から月刊少年雑誌『冒険少年』を創刊する。翌24年1月に創立者が日本正学館に入社、5月から『冒険少年』の編集長になる⁴⁴。10月号から『少年日本』と改題し意欲的に取り組んだが、日本正学館の経営不振から12月号で休刊を余儀なくされた⁴⁵。戸田が創価大学の構想を語った昭和25年11月は、戦後の戸田にとって最も苦難の時のことであり、それからわずか21年後に創価大学が設立されることになるとは誰が予想できたであろうか。

『冒険少年』『少年日本』は、戦後の物資の著しく不足している中で、カラー紙面も多い読みやすい雑誌になっている。何より、毎号南洋一郎（池田宣政）、野村胡堂、海野十三、山岡荘八ら一流の作家と小松崎茂、山川惣治、山口将吉郎等一流の挿絵画家を揃えた充実した内容である。また、『冒険少年文庫』として単行本4冊出版している。

昭和5年の創価教育学体系出版から昭和25年までは、戦争と敗戦の混乱の20年であった。この厳冬の時期を戸田は、主に出版を通じて教育事業を行っている。

4. さいごに

a. 構想の継承と創価学会の基盤の確立

戸田城聖が初めて創価大学の設立構想を池田大作に語ったのは、昭和25年11月16日の日大食堂での二人の語らいである⁴⁶。4日前の七回忌法要で戸田は先に述べたように創価教育学体系出版の頃を語った。二日後の11月18日には、創価教育学体系が出版されて20年を迎えようとしている。そこに牧口を支えてきた戸田の青年時代と二重に写る青年がいた。戸田が、この日、創価教育の学校を作ろうと池田に語ったことは決して偶然ではなかったのだろう。

その後、戸田は昭和33年4月2日の逝去まで、直接教育事業に従事することはない。創価学会の会長として生涯の誓願とした75万世帯達成へと走りぬく。しかし、戸田は、会長として日々青年を薫陶すると共に、「校舎なき総合大学」、生涯にわたって人間学、哲学など幅広く学ぶ創価学会を形成していく。創価大学の成立史という視点で見えていくとき、この時期に創価大学成立の基盤が着実に固められたといえよう。

昭和29年戸田が青年達とともに氷川に研修に行く途上、現創価大学の近くを通ったバスの中で「いつか、この方面に創価教育の城をつくりたいな⁴⁷」と語った。この一言は創立者の心にしっかりと刻まれた。また、翌昭和30年、池田と共に高知を訪問した際、土佐女子高校で行われた質問会でも創価大学設立の構想を語っている⁴⁸。

昭和33年4月2日の戸田の逝去から10年後の昭和43年4月には創価学園開校、そして昭和46年4月2日には待望の創価大学の開学式が行われた。戸田逝去の日、4月2日は、創価大学の創立記念日として永遠に残ることとなった。

b. 創価教育成立史の年代区分の試み

ここで、創価教育の成立史を大まかに年代区分する試みを行いたい。

第1期は『牧口の時代』である。1892年から1901年、牧口が札幌師範学校で教職を執った時代の「揺籃期」、1901年から1920年の人生地理学の出版と東京における教育実践の「成熟期」、共にこの時期は、牧口は教員・校長等としての優れた教育を行っているが、地理学・郷土研究に深い関心を持っている時期である。

第2期は『牧口・戸田の時代』である。1920年から1930年は、牧口と戸田による創価教育の「成立期」とでも呼べる時期である。1930年からの1940年は、戸田を中心とした、「創

価教育学会草創期」であり、1940年の創価教育学会の会長、理事長に牧口、戸田が就任する頃⁴⁹から獄死出獄の1945年は、創価教育学会が宗教団体としての色を鮮明にする時期である⁵⁰。「創価教育学会宗教運動期」とでも呼ぼう。1945年から1950年は、「創価学会再建期」となる。

第3期は『池田の時代』である。1950年から1960年池田が会長に就任するまでは、「初期創価学会の発展期」として基盤整備の時期となろう。1960年から1970年は、「本格的準備期」である。池田は会長就任とともに学園・大学の用地の視察・購入するなど具体的な準備を開始する。そして、1968年には創価学園が開校、1971年に創価大学が開学、さらに、2001年にはアメリカ創価大学がリベラルアーツ・カレッジとして開校した。

c. 戸田城聖の目指したもの

年代区分でもわかるように、戸田は、牧口とともに創価教育学を確立し、国家を覆った「戦争の時代」にあってもその実践の先頭を走り、教育機関創立の確固たる基盤を築いた。全ての子どもたちの幸福を目指す牧口の創価教育学を、「出版」という方法を使って、今の言葉で言えば、バーチャルな教室において実践した。このことは、牧口の青年時代の実践とも重なるものである。

全国、さらには全世界の子供たちの幸福、そして生涯学習という視点に立った時、創価教育の理念に立った、もしくは共鳴する教育機関のネットワークによって、「いつでも」「どこでも」「だれでも」学べる創価教育のシステムが望まれる。その先鞭を本学では通信教育部が切り、日本でも第二番目の学生数を有する大学通信教育となった。今後ITの活用によりさらに多様な、またボーダレスな展開も可能であろう。

「人間の心の豊かさ」が最大の課題となり、強く求められる21世紀、創価大学が地球規模でどのような展開していくか大いに期待される場所である。牧口先生、戸田先生も楽しみにご覧になっているのではないだろうか。

1 「創価大学本部棟落成祝賀会スピーチ」『創立者の語らい vol.6』所収 平成11年 198頁。初出は、牧口常三郎全集月報、第三文明社。

2 創価教育学体系第3巻、第六節（乙） 国立教育研究所論 第二節 国立的教育研究所設立案に、以下のようにある。（第三文明社『牧口常三郎全集』では、第六巻 135-139頁）

一、本研究所は左の三機関の協力によつて目的が達せられるものとする。

1 創価教育学を実現するに任するに足る高級なる教育技師の養成を目的とする高等の師範学校。

2 創価教育学の実験証明をなす目的の附属小学校。

3 教育事業の成績に関する自他のレコードの調査機関。

以下、創価教育技師養成所案が述べられ、次に、附属小学校について、「附属小学校の経営要旨。

特に貧困児童を收容することゝする。即ち、小学教員の候補者に純真に教育の興味を起さしめる為には之が練習所たる附属小学校に須らく貧困児童を收容すべきである」とあるのは、注目すべきである。

- 3 戸田城聖の伝記資料としては、妙悟空（戸田）『人間革命』、戸田『若き日の日記・獄中記』、池田大作『人間革命』の他、西野辰吉『戸田城聖伝』、中本博『若き戸田城聖』1から3、奈街三郎『小説 時習学館』などがある。
- 4 窪田正隆の手記によれば大正9年4月には、戸田が西町小学校に勤務していたとある。市川喜久郎編『牧口先生の思い出』 聖教新聞社九州編集総支局 昭和51年 8頁。戸田は、大正9年3月に北海道から上京している。『若き日の日記・獄中記』、91頁。
- 5 牧口は、大正8年12月22日に西町小学校に転任になる。
- 6 『北師同窓会会報』第13号 大正12年12月 4-5頁
- 7 秋山ちえ子『お勝手からごめんなさい』、春陽堂、昭和32年では、戸田宅を訪問し取材した秋山は、「産休の女教師の代用として採用され」と聞いている。戸田が聖教新聞連載の『人間革命 37』で、三月の契約の臨時代用教員と表現したのは、この意ではないか。
- 8 『都市教育』、東京市教育会、大正10年2月の叙任辞令（新任）に「三笠小学校訓導 戸田甚一」の名が記載されている。
- 9 当時東京市の第三助役であった前田多門（郷土会員）によって阻止された。前田は、大正9年12月から大正12年6月まで同職にあった。
- 10 『環境』第1巻第9号、城文堂、昭和5年11月 17頁
- 11 『帝国教育』451号、大正9年2月 87頁
- 12 赴任希望者の少ない三笠小学校と違い、白金小学校に転勤することが叶わない事もその理由にあったかもしれない。
- 13 大正12年秋には、後の時習学館の近所の幼稚園で授業が行なわれ、そこで学んだという証言がある。
- 14 富山県中新川郡北加積村（現在は滑川市）出身。一部の伝記に新潟出身とあるのは誤り。大正12年10月12日に婚姻届が厚田村長に提出されている。
- 15 長女恭代は、大正12年10月12日に千駄ヶ谷町大字隠田46で出生。大正13年5月13日に死亡。
- 16 ツタは、派出看護婦をしていたという証言がある。大正15年11月26日、大崎町上大崎336番地（時習学館）で死亡。
- 17 戸田の中央大学の友人とは、昭三会で交流している。
- 18 創価教育学体系第2巻を昭和6年3月、第3巻を昭和7年7月、第4巻を昭和9年6月に出版している。さらに、昭和8年9月に『教授の統合中心としての郷土科研究』改訂第10版を発行している。同書は、大正元年に目黒書店から出版された牧口二番目の著書で、大正12年5月に二松堂・寶学館から第8版が出版された。
- 19 「牧口初代会長七回忌法要 牧口先生七回忌に」『戸田城聖全集第3巻』所収 416-417頁 および「第三回滝山友光の集い 偉大な創造は魂の絆から」『創立者の語らい 下巻』学生自治会 平成2年 200-203頁
- 20 聖教新聞に連載された戸田『人間革命』には、教育局長と視学課長が自分の子分を校長にするために、牧口を麻布新堀小学校に転任させ、退職の道筋を作った経緯が詳しく描かれている。戸

田は、牧口校長を慕う保護者会の有志らと連携を取りながら、そのような動きを抑え牽制しようと、動いていた。

- 21 『東京朝日新聞』大正13年11月19日付の、「校長先生 白金校の牧口常三郎氏」に、「尚教育学に就て『今までの教育学は哲学的の研究に偏した傾向がある、之を教育現象から帰納したもの則ち科学的の教育学を完成したいと思つて居ます』と語つた」とある。現職の校長としてこの教育学の発表をしたいと考えていたことは、前出戸田『人間革命』の35に牧口の言葉として、「医学は医術を対象として科学される様に教育学も、教育技術を対象として科学されねばならぬ、この考え方はペスタロッチ以来、自分をもつて創始とする。これを小学校長として在職中にぜひ世に出したいものだ。未だ日本に小学校の現職において教育学説を発表した者が居らないと云う事は残念なことである、世の人が認めると認めないに関せず、後代の小学校教員のために是非共発表して置きたい」とある。

- 22 前出『環境』第1巻 第9号に掲載されている賛『創価教育学』の文と肩書氏名を紹介する。
賛『創価教育学』

牧口常三郎氏が教育に対する卓抜なる識見と熾烈なる努力によつてなされた功績は己に周知の事に属し、今更贅言を要せぬ所であります。東京市白金小学校が今日の如き優秀なる成績を挙げたのも、実に其の一端を物語るものでなければなりません。

氏や人格高潔、紛々たる世間の利を趁ひ、栄を求むる裡にあつて、よく君子の樂を得られ、只管教育に献身の努力をなさるゝ所、当世稀なるものといふべきであります。

其の日常繁劇の間に処して研究倦まず不断の思索、貴き経験、之をめぐらし、之を積んで其の独自の教育体系の完成に肝膽を砕かるゝ、道に篤き事、到底儕輩と日を同うして語るべきではありません

其の功績を慰藉し、其の人格を欽仰し更に其の貴重なる教育体系の完成の努力に敬意を表するために、精神的後援をなすことは士を待つるの礼であり、之即ち氏を知るものの徳義でなければならぬと思はれます。

これ先生の創価教育学説の樹立に対し支援会を興し、敬意と後援とを捧ぐる所以であります。
政友会総裁 犬養毅、関東庁長官 太田政弘、法学博士・農学博士 新渡戸稲造、前通信事務次官 古島一雄、前内閣書記官長・政友会総務 鳩山一郎、通信政務次官 中野正剛、前法制局長官・政友会総務 前田米蔵、民政党総務 古屋慶隆、前文部参与官 安藤正純、前東京市助役 前田多門、大審院判事 三宅正太郎、前貴族院書記官長 柳田國男、衆議院議員 牧野良三、司法大臣 渡辺千冬、前文部大臣・法学博士 水野錬太郎、政友会総務 松野鶴平、男爵 中川良長、貴族院議員 山内一次、三菱総理事・太平生命取締役 江口定条、前内閣政務次官・政友会総務 秋田清、前文部商工大臣 中橋徳五郎、商工大臣 俵孫一、子爵 八条隆正、帝国大学教授・医学博士 高木逸磨、工学博士 田中龍夫、改造社長 山本実彦、海軍大将 野間口兼雄、東京市会議員 岸辺福雄。この内、田中龍夫と野間口は、白金小学校父兄。新渡戸、柳田、前田は郷土会員。

- 23 西野辰吉『戸田城聖伝』第三文明社 昭和60年 99-100頁による。

- 24 高崎隆治『戸田城聖の栄誉と『小国民日本』『潮』平成7年5月号 264-265頁

- 25 雑誌等への論文掲載は、『教育週報』昭和5年9月27日付、『神奈川県教育』同10月号、『教育時論』同12月号、『教育女性』昭和6年2月号、『長崎教育』同4月号、『学習研究』同5月号、『小

学校』昭和8年6、7月号、『人と国策』昭和9年2月号、『帯広市教育』昭和10年1月号がある。特に『教育週報』は、度々牧口と創価教育学体系を取り上げている。なお、『人と国策』については、未見。

- 26 昭和6年3月発行の『創価教育学体系』第2巻巻末に、田辺寿利の『改造』第13巻第2号、昭和6年2月1日の書評、甘蔗生規矩の『環境』第10号の書評、一記者による『中外商業新報』昭和5年12月7日付の書評、『東京ニュース』昭和6年1月1日付の書評、『教育週報』の昭和6年1月17日の書評が紹介されている。

第一に、『改造』の書評は、有沢廣己の全国経済調査機関連合会編『日本経済の最近十年』の書評と、小林秀雄の谷川徹三著『生活・哲学・芸術』の書評の間に置かれている。なお、創価教育学支援会の一人、山本実彦は同社の社長である。

第二に、体系に甘蔗生規矩の『環境』第10号の書評とあるものと同文が、『帝国教育』昭和6年3月号に「創価教育学体系を読む」として掲載されている。また、『教育学術界』昭和6年3月号の新刊紹介にも筆頭で、『創価教育学体系（第一巻）』が掲載されている。『初等教育研究雑誌 小学校』昭和6年5月号にも長文の紹介がある。これら当時の代表的な教育雑誌に掲載されていることは何を意味するか。牧口がこの時期各誌に登場することとあわせ、全国の教育関係者に創価教育学体系の発刊は十分伝わったと見るべきではないか。

第三に、『教育週報』は、創価教育学体系出版後、何度も牧口関係の記事を載せている。先の書評の、「一小学校長の偉業」とのリードに対し、2月7日付では、御法ヶ丘五十彦の「嫌な感じのした『一』の字 牧口氏の著述に関して」という牧口を良く知る人物の投稿を載せている（御法ヶ丘は、本名かどうか不明）。翌2月14日号は、『教育週報』の第300号記念号である。この一面右下に「『教育合理化』の経典！ 教育学の蘇生!! 誕生！」として、創価教育学体系第一巻、二巻の広告が掲載されている。同号4面、5面の『教育の合理化』研究座談会には、赤井米吉、川面松衛、北沢種一、野口援太郎、原田実とともに牧口が参加している。さらに、8面に体系の書評がある。『教育週報』は、記念すべき第300号において牧口を全面に押し出し、支援している。ちなみに、この記念号は、全国の学校三万校に無料で送られたと思われる。（復刻版『教育週報 別巻』、大空社、昭和61年、366頁。

- 27 戸田は、『小学校』6月号において校長登用試験制度の実施、視学制度廃止、半日学校制度論の3点についてインタビューに答えている。[紹介資料]参照。
- 28 北海道立図書館には、昭和18年1月31日に戸田城外によって寄贈された創価教育学体系1-3巻、指導算術等がある。また、札幌市立図書館にも、戸田によって創価教育学体系1-3巻等が寄贈されている。
- 29 指導算術は、昭和16年8月の改版改訂126版まで確認した。その他に、普及版も出版されている。
- 30 昭和9年6月の改訂増補34版以降の背表紙で確認、昭和5年6月の初版は未見だが、前出『環境』昭和5年11月号の広告にも同様にあるので、初版から入っていたと思われる。
- 31 戸田の全集は、和光社・聖教新聞社版とも、教育関係の著作は『指導算術』が収められているだけである。平成20（2008）年は、戸田城聖逝去から五十年になる。この時まで、全著書およびそれ以外の寄稿も含め、著作を揃えたい。
- 32 戸田の出版社からでた雑誌・単行本の広告、出版年鑑も参考に作製した。
- 33 日本文学報国会編纂『文芸年鑑 皇紀2603（昭和18）年版』桃蹊書房の「雑誌界の動き」によ

れば、昭和15年11月、『小学生日本 五年』『小学生日本 六年』は『小学生日本』に合併となる。昭和16年10月3日の情報局の通牒により、学年別児童生徒の雑誌は全て廃止されることになった（出版年鑑 昭和十七年度 51頁）が、このような当時の時代状況や紙の統制も合併の理由であろう。

34 前出『文芸年鑑』によれば、昭和16年3月に『小学生日本』は『小国民日本』に改題される。『データブック 新・人間革命』、潮出版社、平成8年の55頁には、「小国民日本 改題小学生日本」として、昭和16年3月発行の『小国民日本』第2巻第12号の写真が掲載されている。

35 『小国民日本』第3巻第3号による。

36 前出『文芸年鑑』78頁による。なお、『出版年鑑 昭和十八年度』95頁では、5月ある。

37 『治安報告控』48頁には、戸田は、昭和18年10月11日に東京拘置所に入ったとある。

38 尾崎秀樹「鶴沼閑話―聞書による回想」『子母沢寛一人と文学』、中央公論社、昭和52年、51頁には、「野中兼山を調べたときもそうでした。とうとう思い切って書きはじめたのですが、それを出版してくれた本屋が、その作品にほれこんで、社名を大道書房とした思い出があります。大道書房は、例の創価学会の二代目の会長、戸田城聖が、まだ城外をなのっていたころ経営していた出版社でね。（以下略）」とある。

39 戦前、戸田の大道書房から出版された本は、56冊確認できる。

40 朝日新聞・読売報知新聞、毎日新聞には、翌昭和21年5月7日までに、それぞれ、11回、11回、14回の広告が確認できる。昭和20年9月4日以降、英語講座が追加され、昭和21年1月4日以降、高専受験科も開講する。通信教授の広告は、昭和21年5月7日が最後で、その後各紙に掲載されるのは、『民主主義大講座』の広告である。戸田が、戦後、通信教授を行ったのは、約2年間ということになる。

41 戦後、戸田は、日本正学館、日正書房以外に、大道書院を経営した。ここでは、昭和23年11月から24年11月まで、月刊婦人雑誌『ルビー』を発行。単行本も、1冊出版した。

42 『タノシイコードモ』のローマ字表記による。

43 戸田は、終戦の年昭和20年には、江戸川乱歩に会い出版を依頼している。平井隆太郎、「江戸川乱歩」、『想い出の作家たち 1』、文芸春秋、平成5年、321頁

44 池田は、自身も山本伸一郎のペンネームで、「大教育家ペスタロッチ」を『冒険少年』昭和24年10月号、「ジェンナー人類を救う」を『少年日本』昭和24年11月号に書いている。

45 『冒険少年』は、昭和23年1月号から昭和24年8月号、『少年日本』は昭和24年10月号から12月号が出版されている。その後、少年雑誌の出版は、潮出版社の『希望の友』の昭和39年4月創刊によって受け継がれた。

46 前出「創価大学本部棟落成祝賀会スピーチ」197頁。

47 同上 195頁

48 同上 196頁

49 『価値創造』第1号4面に、創価教育学会の組織として、会長牧口、理事長戸田の名前が掲載されている。

50 創価教育学会の機関誌、『環境』（昭和5年頃）『新教』（昭和10年から11年）『教育改造』（昭和11年）と『価値創造』（昭和16年から17年）では、記事の内容が大きく異なる。

[紹介資料] 雑誌『教育研究雑誌 小学校』昭和8年6月号掲載の
戸田城外インタビュー記事

戸 田 城 外

於創価教育学研究室

● 一、小学校長登用試験制度の実施

小学校の校長は小学校の教員として其の理想を実現し具体化するに尤も大切な位置である。現在の小学校長は社交術にたけたものでなくてはならない視学に睨まれたものが校長になるには視学以上の力の持ち主が視学を圧迫した場合にのみ実現されて居る。而して視学の御覚え目出たいか又は以上の先輩に愛せらるゝ要素は何か金か追従か縁故関係か。此の三つをのぞいて何が残ると言いたい様な気がする。教授法の練達学校管理の実際研究教育学の実際研究等これ等がどれほど校長になる為に役立つか。此の二方面を考察したときそゞろに日本の前途を嘆かざるを得ない、鳩山文相は位階勲等を小学校に贈つたがこれがどれ丈日本の教育界革新となるか。文部大臣がこんな頭でどうして非常時日本が匡救出来るか。実に斯く如く憫笑に値ひするのが現下の日本教育界の事情である。憂国の士は教育界より立たねばならぬ。しかるに日本の現在の教育界の沈滞の程度は実に涙なくして見る能はざるものである。舉丸をぬかれた豹の如きものが現在の学校教員だ。余が斯く論じて、憤りのあまり、余を面罵するもの幾人かある。

この現時の日本教育界を救ふ唯一の道は小学校長への登竜門を拓き新進の若武者をして日本の教育界に精進せしめる以外に道はない。

● 二、視学制度廃止

視学は無用の長物である。視学は何をするものだ。今一般常識論として視学とは何かと言ふ問ひに対して必ず「教育界の警官」と答へるものが大多数と信ずる。學術の指導者と信じて居るものは幾人ありませうか。教育界に警官が入用か。校長の役目は何だ。校長の法的存在は何だと言ふことになりはしまいか。いやその校長のために必要なんだと言ふならば、そんな校長は首にしろと言ふことになりはしまいか。學術の指導員と言ふならば、部下の學術の指導も出来ないものが校長になつて居るなどと言ふことは日本の教育界の不祥事ではないか。又校長より給料の安い指導員なんて言ふのは一寸滑稽の感がある。非常時日本に視学制度は無用の長物である。

● 三、半日学校制度論

教室五十人より三十人が教へよくて三十人より二十人がまた教へよい。今の成城学園慶應その他の私立旧式教育学は旧いのをかくす為に新しがつて生徒の多くなる社会文化の進展に波にさからつて生徒の少ない方を主張する。しかし非常時日本はそんなことでよいか、日本の小学校に要する経費を節減する為には五十人より百人、百人より二百人と一人の受持つ生徒を増大して、より能率的に、且つは教師の過労をふせぎ、その上に物的待遇を向上させる方案が必要ではないか。これが為に小学より大学まで半日学校制度を余は主張する。かくすることが一方インテリ失業者の匡救にもなるのだ。一年より大学までペンとノート以外よりもたぬものが非常時日本を担当する青年となり得ようか。半日は学校に半日は労働に、そして心肉一致の青年を作るのが現下の急務であると余は信ずるのである。

半日は山に出でよ、田にも出でよ入つてハンマーをも振へ、親爺の荷車の後も押せ。半日学窓に実業的教育をうけよ、高き理想にもえつゝ、冥想もせよと、余は叫ぶのである。余つた教員余つた機会はあらゆる所に中学、実業学校及より実質的な青訓所として表れる筈だ。そしてよりよく待遇せられた教員が快活に「生き生き」として指導する筈だ。市には大学、村には冬期大学が開かれて三十、四十の壮年が夜に、昼前に昼後に集まらねばならぬこれ以外非常時日本を救ふ教育界の革新はないのである。